



神戸の発展に貢献した

神戸と言えば誰しも国際性豊かな港湾都市を思い浮かべるでしょう。150年前には鄙びた漁村に過ぎなかった神戸村が、今日のように大発展を遂げるのに大きく貢献したのは、摂津三田藩・最後の藩主九鬼隆義を筆頭とする家臣団でした。「鳥羽水軍」の末裔ながら、三田で雌伏せざるを得なかった九鬼氏が明治になって海へ「里帰り」を果たしたという因縁話になります。

その一人が、小寺泰次郎(1836-1904)です。元々、郷掛(年貢徴収役)という下級武士でしたが、経理に明るく商才に長け、先見性に優れた彼は隆義に抜擢され、白洲退蔵とともに志摩三商会の設立に参加、繁盛させました。その後、独立し地租改正に乗じて、外航船の着岸に有利な点に着目して兵庫港より東側の土地、ご存知の元町、三宮周辺の土地買い占めに走ります。海外に向けて飛躍する神戸の将来を見据えた不動産投機は見事に的中して一躍、大富豪の仲間入りしました。

がめついだけの吝嗇な商人と思いきや、彼は近代都市計画に欠かせない「道路の新設・拡幅」に手腕を發揮し、自己所有地を公道として寄付するなどインフラ整備に貢献しています。また、私心のない「慈善家」としても有名で学校を



小寺泰次郎像(部分)
神戸市立小磯記念美術館蔵

はじめ多くの公共事業に多額の寄付を行っています(家憲に言い残したそうです)。まさに今日的な「フィランソロピー」の先駆者でした。一方、一家の生活は謹厳実直、質素を旨とし、子供たちへの教育も非常に熱心で見事な閥閥(その一端は後述)を形成したのです。

泰次郎の長男、小寺謙吉(1877-1949)もまた神戸にとって忘れてはならない恩人の一人です。父の建築した広大な小寺本邸(現在の「相樂園」)で生を享け、何不自由ない生活を送って小事に拘泥しない磊落な性格の持ち主に成長し



小寺 謙吉

ます。その学歴も半端ではありません。1897年に米国へ留学し、エール、コロンビア、ジョンズ・ホプキンスの各大学で法律・政治学を学び、学位を取得したのち、さらに欧州へ渡りハイデルベルク、ジュネーブ両大学でも国際法学の勉強を続けます。ちょうど、日露戦争の勃発で急遽呼び戻されますが、外国語に堪能な彼は諸外国の従軍記者相手のスポークスマンを務めて兵役を終えています。

1904年に31歳の最年少記録で兵庫県選出の衆議院議員に当選します。以後、6期連続当選を果たす国際政治に精通した「学者代議士」の誕生でした。しかし、政治家としての謙吉の人生は、決して順風満帆ではなかったのです。短絡して